

平成 26 年度「スラヴ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」

プロジェクト型研究

『賢者アキルの物語』スラヴ語圏テキストの比較研究

ースラヴ文献言語学の再構築をめざしてー

研究代表者 三谷恵子（東京大学）

共同研究者 服部文昭（京都大学）

報告書

・ **研究の概要** 本研究は、中世スラヴ文学テキスト『賢者アキルの物語』を分析対象として、スラヴ文献学の新たな方法と研究枠組みを構築しようという目的で行った。

・ **研究の背景と目的** 古いスラヴ文献（翻訳・創作いずれも）の研究は、19 世紀以来、スラヴ各地において古写本の発見とともに発展し、スラヴ諸語の通時的変化や中世スラヴ文化の理解に貢献してきた。近年に至っては、資料のデジタル化や、コンコーダンスのようなテキスト分析ツールの普及が進み、中世文献研究への新たな可能性も広がった。このように研究環境が充実する一方で、スラヴ圏では、共通テキストの通スラヴ的視点からの比較研究、あるいは現代の言語学や文学理論を援用した研究、また歴史・宗教・民俗学などの分野の研究者を交えた学際的な研究などは、さほど進展していない。個別の地域で作られたスラヴ写本・文学作品の研究は、とりわけソ連・共産圏ブロックが消滅し“スラヴ研究”に取り組む体制が後退して以後は、むしろ当該地域の民族文学史の中に収束してしまう傾向さえある。

こうしたことを念頭に、本研究では、中世スラヴ世界とくにロシアおよび南スラヴ圏で流布した『賢者アキルの物語』（以下『アキル』、なおロシアではふうつ *Повесть об Акире Премудром* として知られている）を、中世スラヴ文献学、スラヴ語学、中世文学・歴史研究などの視点から多角的に分析すること、またこれを通して、新たな中世文学研究へのアプローチを見出すことを目的とした。

・ **研究内容と分担** 『アキル』は、その発生を古代メソポタミアにもち、起源前後数世紀の中東すなわちユダヤおよびキリスト教世界で一つの物語として形成された。この物語が 12～13 世紀頃、スラヴ語に翻訳されてロシアおよびバルカン南スラヴ圏に流布したと考えられ、スラヴ世界では合計 50 ほどの写本が作られている。中東域では、シリア、アルメニア、エジプトなどに翻訳写本が残され

ており、中東一帯に広く知られていたことが示される。また『アラビアンナイト』（バートン版補部など）にも収録されていることから、アラブ世界にも伝わっていたことは容易に推測される。これだけ中世中東域に流布しながら、その一方で、ギリシャ語テキストがなく、ここからスラヴ語世界にどのようにして伝播したのかが今日なお未解決のまま残されている。またスラヴ・アーキタイプ成立の場所についても、先行研究においては、ロシアの研究者の多くが、キエフルーシ時代にロシアで翻訳され、それが南スラヴ圏に伝わったとし、南スラヴ圏の研究者は南スラヴ圏、おそらくはブルガリアで翻訳されただろうと主張してきた。近年、ブルガリアの I.クジドワ (Кузидова 2010) がこれまで未刊行であったスラヴ圏最古の写本 (モンテネグロ・サヴィナ修道院所蔵) を刊行し、これを受けて南スラヴ説が有力になりつつあるが、最終的な結論は得られていない。さらに、『アキル』のスラヴ写本は、そのほとんどが東方教会圏で作られているが、バルカンではカトリック圏ダルマチア (現在のクロアチア) でも三写本が知られており、ここから、スラヴ圏内でのテキスト伝播のあり方、またさまざまな時代に書かれた写本の相互関係が、解明すべき課題として存在していた。

こうしたことを念頭に、研究代表者三谷が南スラヴ圏テキスト、とくにセルビア・ボスニア・クロアチア圏写本、共同研究者服部がロシアの写本を担当し、それらに現れる言語特徴、および写本間の関係、またスラヴ圏翻訳の起源の解明に取り組んだ。方法論としては、服部が伝統的なテキスト比較研究の手法に依拠し、三谷は、現代翻訳理論やテキスト言語学、機能主義言語学の分析枠組みを援用することとした。

・実施と成果 本研究の実施状況ならびに研究成果を公開すべく、平成 26 年 10 月 11 日および 27 年 3 月 16・18 日に研究会を開催した。

・平成 26 年 10 月 11 日 特別セミナー「スラヴ文献言語学の課題と新たなアプローチ 『賢者アキルの物語』 の分析を例にー」

このセミナーは、本研究の中間報告という位置づけで、東京大学文学部にて実施した。ここでは、佐藤純一東京大学名誉教授を講師に迎え、佐藤教授、服部、三谷が報告した。

佐藤教授は「『賢者アキルの物語』ーテキストをめぐる諸問題・ブルガリアとロシア」と題して、この物語の概要と、『アキル』に関する最新の B.ルリエによる研究 (Lourie, 2013) を紹介した。『アキル』については、19 世紀のピピンやヤギッチに始まる長い研究史があるが、ルリエ論は、Кузидова (2010) (上記) を

ふまえて、スラヴ圏写本をシリア版などの中東リセンションと比較し、スラヴ語テキストは、シリア・リセンションから翻訳され、南スラヴ圏（ブルガリア）においてアーキタイプが作られたと主張するものである。ルリエはまた、このシリア・リセンションは、ササン朝ペルシャ内の非カルケドン派キリスト教世界で作られたために、カルケドン派のビザンツ圏には受け入れられなかったはずであり、ここにギリシャ語版がない理由が見出されると述べている。ルリエの主張は刺激的であり、中世文献への斬新なアプローチとして評価できるが、テキストの読みにやや疑問点もあり、本研究班では全面的には賛同しかねるという意見であった。

服部の報告「『賢者アキルの物語』をめぐって—ロシア文章語史の視点から」では、ロシア・リセンションの系譜関係、ならびに、このテキストに関するロシアの先行研究が紹介された。三谷は「『アキル』はどう伝わったのか—南スラヴ語圏テキストの関係」として、南スラヴ語圏、とくにセルビア・クロアチア圏の写本について分析した結果を報告した。その中でとくに、クロアチア・リセンションと、セルビアに残されるいくつかの写本との間に、テキスト上密接な関係が認められることを指摘した。

・平成 27 年 3 月 16 日・18 日 シンポジウム「『賢者アキルの物語』—中世スラヴ文学への新たなアプローチ」(The Story of Akir the Wise: A New Approach to the Medieval Slavic Literature)

平成 27 年 3 月、外国人研究者 2 名を招聘して上記シンポジウムを開催した。参加者は、ロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所（プーシキン館）中世文学部門主任研究員のアレクサンドル・ボブロフ氏、クロアチア・古スラヴ研究所研究員のアニツァ・ヴラシッチ-アニッチ氏、電気通信大学の三浦清美氏（中世ロシア文学）、北海道大学文学研究科の太田敬子氏（中東史）、および服部、三谷である。

ボブロフ氏の札幌報告は“The Story of Akir the Wise in the Musin-Pushkin Collection”，東京報告は“Древнейшая русская редакция Повести об Акире Премурдом”であった。札幌報告では、『アキル』のロシア最古の写本が含まれていたとされるムーシン・プーシキン文集が、もともとキリル・ベロゼルスキー修道院に保管されていたものであること、またこの時点で『アキル』は『イーゴリ遠征物語』や『デウゲーニイの事績』などともにグループ化されており、こうした文集の構成は『アキル』のロシアにおける伝播の経緯を考えるさいに重要

であることが述べられた。ボブロフ氏の東京報告では、札幌報告を発展させて『アキル』の“文学的環境” (литературное окружение) に注目すべきであると指摘された。『アキル』のようなテキストは単体で存在せず、つねにコレクションの中に含まれていた。従ってそのコレクションがどのような意図で編纂されたものか、コレクションにどういったテキストが含まれるかを見ることで、個々のテキストの受容と伝播のパターンを明らかにする糸口を見つけることができるとした。本研究班でもこのことはすでに認識しており、今後の継続課題としていることから、ボブロフ氏の議論には共感し、また学ぶところが大きかった。

ヴラシッチ-アニッチ氏は札幌発表“The Croatian Glagolitic Tale of Akir the Wise — an intertextual ‘literary kaleidoscope’”および東京発表“Библейские цитаты в хорватскоглаголическом тексте Слово премудрому Акировой”で、クロアチアに残されたグラゴル文字テキストの『アキル』に焦点をあて、『アキル』に聖書のさまざまな部分からの引用あるいはそれに近いものがあることを、多くの実例で示した。ただし、『アキル』の聖書からの引用はグラゴル文字テキストのみに限られるものでないことから、グラゴルテキストに固有の引用パターンがあるとなればそれは何なのか、その背後にどういった文化的要因が関わっているかはかならずしも明らかにされず、今後課題を残したといえる。

服部氏は『アキル』のロシア歴史古代学協会 (OIDR) 写本、スラヴ圏最古の写本とされる Sav29、今は失われたロシアのソロヴェツキー写本のテキストなどを比較し、ブルガリアに残された NBKM309 写本が、前半は古いリセンションを反映しており、後半には新しい要素が入った形になっていることを指摘した。

三谷の札幌報告“Rewriting Words of Wisdom: The Slavic Recensions of the Story of Akir the Wise”では、『アキル』のロシアおよび南スラヴテキストを縦断的に扱い、『アキル』に見られるさまざまなテキストの書き換えを、テキスト言語学と翻訳理論の枠組みを援用して分析し、テキストの仲介者としての写字生あるいはその監督者・依頼者などの介在性を指摘した。東京報告“Акир премудрый между Slavia Orthodoxa и Slavia Latina: южнославянские списки текста «Слово Акира премудрог»”では、南スラヴ圏写本の系譜関係、とくにセルビアに残された写本の一つがクロアチアで作られた三つの写本と同一リセンションにあることを明らかにした。そしてここから、中世バルカン世界では、東西教会の境を超えて、ある種の情報ネットワークが形成されており、テキスト伝達に関わる

人々が最新の情報を得るために相互の接触を持っていたとした。

三浦氏は、東京セッションの報告“К вопросу о совпадениях двух сказаний: «Повесть об Акире премудром» и восточные сказания о скрытых мудрых родителях”で、『アキル』の物語部分と日本の『枕草子』に記されている蟻通明神の伝説、『今昔物語』天竺編に含まれる説話などを比較した。そしてこれらが民話研究で知られている“難題型説話”に属すること、また老齡の親を殺す・隠す、といったモチーフを共有しており、インド起源の説話に辿り着くであろうこと、これが東西にやや異なるパターンで拡散したことを指摘した。老齡の親を隠し、その知恵で難局を切り抜けるというモチーフはアールネ&トンプソンの981番に類型化されている。したがってA&Tでは922番とされている『アキル』も、むしろこの981番であろうと三浦氏は指摘した。

太田氏は、中東史研究の立場から“*Aḥīqār al-Ḥakīm: The Story of Akir the Wise as a Heritage of the Middel East*”として、中東圏におけるアラム語テキスト成立過程とその伝播の諸相を、Lindenberger (1983) の説を紹介しながら説明した。

このように、本シンポジウムでは一つの物語を多角的に検討し、学際的な研究アプローチの重要性を確認することができた。

まとめと今後の課題 本研究によって、以下のことが明らかにされた。

(1) 『アキル』は、ロシアにおいては『イーゴリ遠征物語』の最古の写本とも深く関わり、中世ロシア文学の系譜や文集成立過程を考える上で重要なテキストであり、いっぽう南スラヴ圏においては、東西教会の文化的境界を超えた情報伝達のあり方を示唆するものである。

(2) 『アキル』はまた、物語の内容から考えて、日本にも伝わった伝承とも結びつく、ユーラシア文化交流の大きな流れの中に位置づけられる性格のものである。

(3) 『アキル』に代表される多くの中世翻訳テキストは単独では存在せず、なんらかのコレクションの中に収められていることから、コレクションのレパトリーやその作成者の意図を考えることが、当該テキストの成立事情や文学的意義を考える上で重要である。

(4) 口承によって伝えられるテキストと書記によって伝えられるテキストの関係性を重視する必要がある。

本研究では、スラヴ圏『アキル』に関する最大の謎である、どこからこの物語がスラヴ語に翻訳されたか、アーキタイプはどこで作られたか、という問題の

解明には至ることができなかったが、この点については、上記の成果をふまえて今後さらに研究を続け、この問題に取り組んでいきたい。

本研究は、今のような情報通信手段のない中世世界でも、さまざまなテキストが文化の境界を超えて伝播し、またその伝播の背後には、それぞれの地域の文化のあり方やテキスト伝達に関わる人々の‘個性’があったことも明らかにした。本研究班では、この成果を発展させ、『アキル』とともに同じ文集に現れるいくつかのテキストの比較研究を加えながら、さらに中世スラヴ文献研究の新たな研究パラダイムを開拓していきたいと考える。

なお研究経費は、上記のとおり実施した研究会に係る諸経費（外国人旅費）、翻訳校閲謝金に使用した。

研究代表者 東京大学人文社会系研究科
三谷恵子